

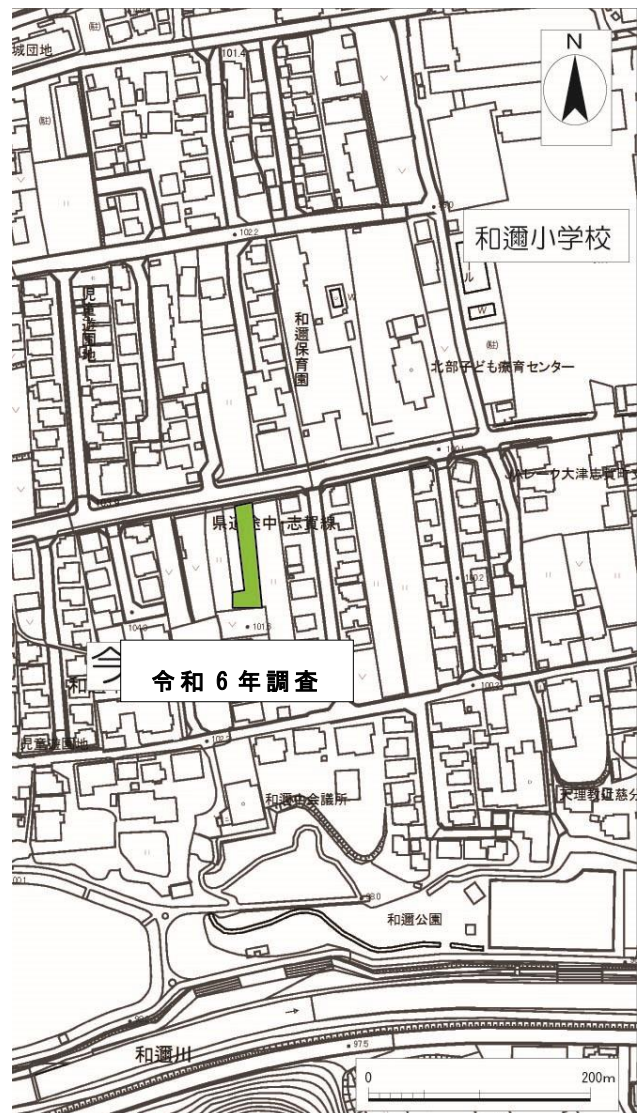


## 遺跡紹介① 中畑田(和邇中)

大津市和邇中に位置する中畑田遺跡は、奈良時代から平安時代ごろの官道である北陸道沿いに位置します。和邇地域は平安時代の法令集「延喜式」によると、官道の中継地点である駅家があったところだと言われています。近年土地開発等が多く、それに伴う発掘調査も多く実施されている所です。

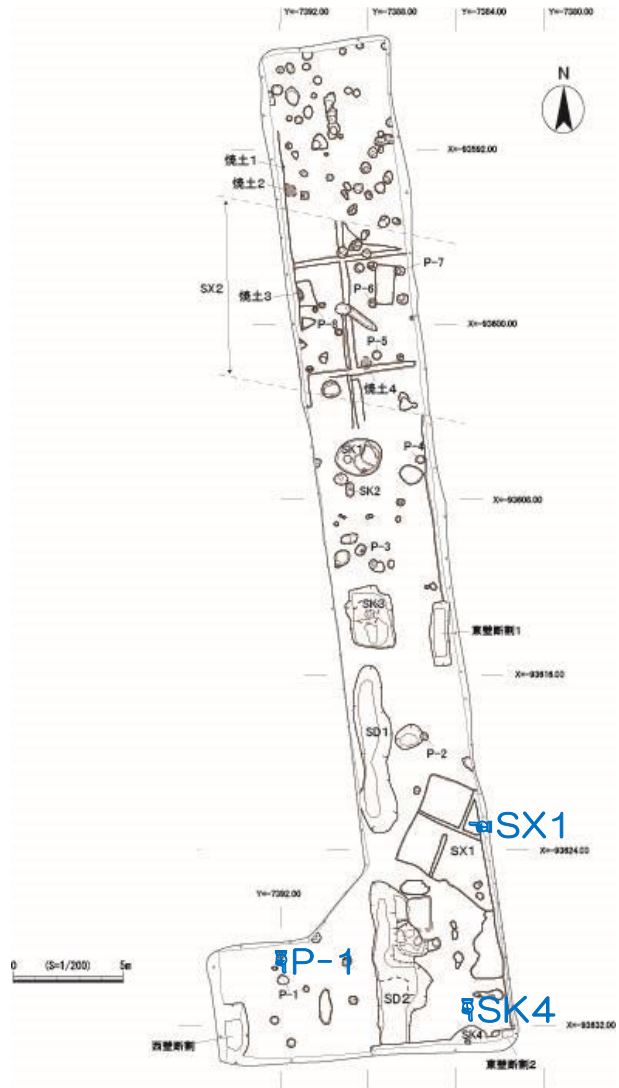
昭和 60 年度の発掘調査では、総柱の掘立柱建物跡が検出され、猿面硯や緑釉陶器等が出土しました。また、奈良・平安時代に朝廷が発行した皇朝十二銭も約 200 枚出土し、これらのことから、この地に古代の役所である官衙的な施設の存在を確認することができました。

その後、何度か行われた発掘調査では掘立柱建物跡の検出、「南」・「林」と書かれたと思しき古代の墨書土器の出土があり、官衙的施設の存在を想定することができます。また、縄文土器の破片や弥生～平安時代の土器類・石器類が出土し、官道や官衙が設けられる以前からこの地域には人々の営みがあったことが伺い知れます。



令和6年度、宅地造成に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴建物と思われる遺構や、奈良～平安時代の溝、ピット、土坑などが見つかりました。竪穴建物跡のひとつ(SX1)からは、東海地方の特徴を持つ土器と近江地方の特徴を持つ土器が出土し、このことで、両地の交流があることが分かりました。また、土坑(SK4)の付近では、フィゴという空気を送るための鍛冶道具の羽口が出土しました。埋土には多くの焼土が混じり、周辺にも同じ焼土が積み重なった跡が検出されたことから、この近辺では鍛冶を行っていたことが推測されます。

そのほか、ピットのひとつ(P-1)からは、ほぼ完全な形で土師器の皿が出土しました。この皿は、口縁などにススが付着しており、灯明皿として使用した後、穴に埋めて地鎮の祭りを行ったと考えられます。



調査区南半部（北東から）



土師皿出土状況（P-1）

## 遺跡紹介② 坂本遺跡(下阪本四丁目)

坂本遺跡は、大津市坂本・下阪本に広がる遺跡です。これまでの発掘調査において、町屋が連なる集落の跡などが検出されました。また、天目茶椀などの茶の湯道具が多く出土し、この地域では多くの方が住み、栄えていた様子がうかがえます。

令和6年度に、宅地造成に伴う発掘調査が下阪本四丁目の松ノ馬場通りの北側で行われました。その結果、調査区中央に南北方向へ延びる道跡<sup>みちあと</sup>が見つかりました。これは、隣接する松ノ馬場通りに直交するものと考えられます。東西方向にはしる松の馬場通りは、中世からの道を踏襲すると考えられていますが、今回に使ったもの



は、これと直交するかたちとなります。主要な通りから延びる小路のようなものと考えられます。また、この道跡は、何度かかさ上げをして作り直された痕跡があり、複数の時期に渡って道として機能していたようです。

この道跡を挟んで東西で、異なる様子が分かりました。まず、道跡の



道跡検出状況

西側は少なくとも 3 層の生活面があったようです。上層遺構面では石組井戸と石組土坑が確認されました。中層・下層からは礎石として使われていたような石が見つかったことから、理由は不明ですが、地面をかさ上げしながら集落が営まれていたと考えられます。

それに対して道跡の東側では、遺構面は一つで、もともと生活しにくい湿地に土を入れて土地を造成していた痕が検出されました。また、調査区の東端では溝状の落ち込みがあり、道路と平行する水路があった可能性があります。

出土遺物としては、<sup>すりばち</sup>や<sup>はがま</sup>・土師器の皿などの生活用品のほかに、香炉・天目茶椀・青磁椀や金属製品など、趣味を楽しむものや仏具と思われるものなどさまざまです。さらに、道跡の東側では、木製の下駄が 4 点（2 足？）まとまって出土しました。縁側などの建物の端にあたる地点と見られ、履物を脱いだあととも考えられ、当時ここに住んでいた人々の生活を垣間見ることができます。



調査区全景（東から）



石組井戸



下駄検出状況

埋蔵文化財調査センターだより  
「大津 むかし・むか〜し」 35 号  
発行：令和 8 年 3 月 31 日  
作成：大津市埋蔵文化財調査センター  
〒520-0006  
大津市滋賀里一丁目 17-23  
電話 077-527-1170